



創立1880年

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 日本キリスト教会館6階 Tel 03-6302-1960 URL http://tokyo.ymca.or.jp 発行所 公益財団法人 東京YMCA 発行人 菅谷 淳

東京YMCA

2022

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

国際協力ーコロナ禍の今も

バンングラデシユ、ウクライナ、ミャンマーで

新型コロナウイルスのパンデミックが続く中、もともと社会基盤の弱い国や地域では、その影響が深刻です。世界の仲間を覚え、東京YMCAは例年9月、その総力を結集して街頭で募金を呼びかけてきました。今号では、苦境にある世界のYMCAの近況を紙面を通じてご紹介いたします。

バンングラデシユYMCA

深刻な洪水被害再び

バンングラデシユでは6月、近年最悪の季節性洪水が発生し、北東部の低地を中心に数百万人が孤立や浸水被害、食料不足などの困難に見舞われました。バンングラデシユYMCA同盟は、7月早々に職員や青年ボランティアでチームを結成し、被災状況の調査および支援物資の配給などの緊急救援活動を実施。現地YMCAと長年交流のある東京YMCAにも支援要請があり、皆さまからお預かりした国際協力募金により、このプロジェクトに



洪水で床下まで浸水 (ピリシリYMCA)



支援物資を受け取った若いお母さん



プレスクールが再開。児童数は従来の7割程度 (ネビドーYMCA)



募金はコロナの緊急患者を搬送する「YMCA救急車」のガソリン代にも用いられた

熱帯モンスーン気候の影響下にあるバンングラデシユは、国土の3分の2が海抜5メートル以下という低地国。地理的要因により従来自然災害の影響を受けやすい国を、近年では異常な降雨量や海面上昇、巨大サイクロンの増加、そしてコロナが襲っています。東京YMCAが長年支援する「NCFPE(経済的な理由から通学できない子どもたちのための学校)」は、約2年の休校を経てようやく再開。多くの生徒が戻ってきましたが、現在も授業時間は制限されています。コロナ禍で失業し、生活に困窮する家庭も多い中で、教師たちは保護者を定期的に開催して児童の健康面でのアドバイスに加え、教育を継続する重要性を訴え続けています。

被災地では、住居や家財に加えて耕作物が流され、一切の生活基盤を失った人も少なくありません。YMCAは、被害の深刻度や生活の困窮度などから受給者をリストアップし、合計500世帯に米、レンズ豆、食用油、経口補水液などの支援物資を配給しました。

により従来自然災害の影響を受けやすい国を、近年では異常な降雨量や海面上昇、巨大サイクロンの増加、そしてコロナが襲っています。東京YMCAが長年支援する「NCFPE(経済的な理由から通学できない子どもたちのための学校)」は、約2年の休校を経てようやく再開。多くの生徒が戻ってきましたが、現在も授業時間は制限されています。コロナ禍で失業し、生活に困窮する家庭も多い中で、教師たちは保護者を定期的に開催して児童の健康面でのアドバイスに加え、教育を継続する重要性を訴え続けています。

ミャンマーYMCA

社会情勢の混迷続く

ミャンマーの首都にあるネビドーYMCAは、不安定な社会情勢とコロナの二重苦に直面し、長期に渡って大幅に活動を制限されてきました。長年の社会混乱で医療整備が遅れるミャンマーでは、国民の半数以上が農村で暮らす一方で、病院は都会の限られた地域に集中しています。貧困層のための「YMCA農村診療所」を運営するネビドーYMCAは、コロナ禍にあってもこの活動だけは維持し続け、無料または募金程度の診療費で多くの命を守りました。現在はプレスクールやユ

イスの教育プログラム、職業訓練など、従来の活動も徐々に再開していますが、社会不安と物資の不足による苦しい状況は続いています。



ディキャンプでは応急処置の方法も伝えている (オデッサYMCA)

ウクライナYMCA

支援のフェーズ変わる

軍事侵攻から半年以上も、命がけで避難する人が経過したウクライナでも、支援のフェーズが変化しています。YMCAのネットワークを通じて避難者の来日支援は、この半年間で70組154人を数えまし

た(8月25日現在)。避難生活が長期化する中で、現在は就労や教育、メンタルケアなど、生活に密着したニーズも増えています。日本YMCA同盟は、7月より東京との協働プロジェクト「東京ウクライナ避難民マッチング支援」を開始。避難者が個別に抱える問題と行政や民間の支援をマッチングさせる

国際協力募金のお願い

「地域にとって最もふさわしい活動は、そこに住む人びとが選び取っていくもの」。このような考えから、YMCAは、地域に根差して活動する現地YMCAをサポートすることで、国際協力活動を行っています。皆さまのご支援ご協力をお願いいたします。



【振込先】 三菱UFJ銀行 神田支店 (普) 1185213 公益財団法人東京YMCA 【WEB募金】 クレジットカード払いはこちら



【お問い合わせ】 東京YMCA 国際部 TEL: 03-6302-1960 E-mail: kokusai@tokyoymca.org



戦禍で継続されるアートクラス。アイロンピースで作った作品を手に(クロビツニツキーYMCA)

赤三角

6年間のアメリカ勤務から日本に戻ってきてまず実践しようと思ったことは「キャンプ的なことを日常で行う」ということだ。2013年、2019年、東京1フロストバレーYMCAパートナーシップのディレクターとして派遣され、1年の3分の1はキャンプ場で生活していた▼キャンプ中は相手を思いやりながら行動することが多い。困っている人がいたら助ける、弱っている人がいたら休ませる、時には殻を破って新しい自分になる、疲れている時こそユーモアで乗り切る、自然もモノも大切に、広い視野で周りを見て、勇気と責任感を持って行動する等々。そして、ふと我が身を省みて気づかされる。キャンプ場では落ちていくごみを拾うのに街中では拾っていない、キャンプファイヤーを囲んでいると素直な言葉が出てくるのに会議では本音で語ることができていない、子どもたちを前にすると力が湧いて強くなれるのに事務所の中では力が出ない……。自分でもとても不思議だった▼キャンプの魔法は偉大だが、日常でも実践できることはあるはずだ。「キャンプ的なこと」をまずは日常から思っている。

(語学教育・カルチャーMD 池田麻梨子)

■苦しんだ人の目線で学び考える

—第2回広島YMCAユース平和ミーティング

7月29日、「第2回広島YMCAユース平和ミーティング」がオンラインで開催され、国内各地の主に20〜30代の「戦争を知らない世代」約40人が参加しました。

第1部では、在日本韓国YMCA職員の田附和久氏より「もう一つの戦争」と題するお話がありました。戦国時代から現代に至る日本と朝鮮の関係、植民地支配や独立運動を経て「在日韓国・朝鮮人」*となった人びとが歩んだ過酷な人生や生活の様子など、朝鮮から見た二国間の歴史を知ることができました。

第2部では、ビデオインタビューの形で在日韓国人被ばく者のイ・ジョングンさんにお話を伺いました。通勤途中で爆心地から約1.8m離れた地点で被ばくしたイ・ジョングンさん。日本に生まれながら、出自を理由に幼少期より友人や担任の先生、周囲の大人たちから差別を受け、さらに被爆によって「原爆はうつる」と職場でも不当な扱いを受け、二重の苦しみを経験しました。80歳まで本名を明かすことができなかった人生と、核廃絶に向けて証言活動を行う現在の想いについてお話くださいました。

お二人のお話から戦争の愚かさや恐ろしさ、そして、その中で実際に苦しんだ方々の目線から学び考えることの大切さを改めて認識しました。現在ウクライナでは、日夜夜中で空襲警報が鳴り響き、多くの人がいつ自宅が全壊するか、いつ命が奪われるか分からない恐怖に直面しています。戦争が決して過去のことではない現実には私たちは真剣に向き合う必要があると感じました。

このミーティングの翌日、イ・ジョングンさんの訃報の知らせを受けました。ご自身の体験を勇気をもって次世代に伝えてくださったことに感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(総務部 松岡秀実)



※朝鮮戦争(1950-53)、朝鮮半島の南北分断を経て、韓国の国籍をとった「在日韓国人」もいれば、祖国の分断を受け入れる気になれず「朝鮮人」のままでいることを選んだ人もいた。誤解されがちだが、「在日朝鮮人」は北朝鮮の国籍を持つ人々を意味するのではない。

■3年ぶりの全国大会で新記録続出

—第46回全国YMCA少年少女水泳大会

8月16日〜17日、千葉県国際総合水泳場にて「第46回全国YMCA少年少女水泳大会」が行われ、国内18のYMCAから179人(うち東京からは22人)の選手が参加しました。



この大会は、日頃から国内各地のYMCAで水泳に取り組むメンバーを対象に毎年開催されるYMCAの全国大会です。一昨年度は一つの会場に集まることができず、緊急事態宣言下にあった昨年度は家族で宿泊する参加者以外は日帰りに急遽変更。従来通り参加者が一堂に会して宿泊を共にする大会は3年ぶりとなりました。

今大会の全体運営を担ったのは東京YMCA。そこに、埼玉YMCAや横浜YMCAの運営協力が加わり、大阪YMCAや奈良YMCAのスタッフが競技役員を担い、さらに東京YMCA社会体育・保育専門学校の学生も活躍してくれました。

多くの参加者で賑わう全国大会では、スタート台が高くプールも深い。結果だけに注目すれば、9つもの新記録が出た大会となりましたが、いつもとは違う環境の中で緊張して実力を出し切れなかった選手もいたかも知れません。一方で、年齢区分ごとにレースが行われるこの大会に繰り返し出場している選手の間には、良いライバル関係や交流が生まれています。今回も多くの子どもたちが、身近な仲間とだけでなく、全国の仲間と特別な時間を過ごすことができました。このような経験を10年間積み重ねてきた選手もおり、10年連続出場の表彰を受けて、後に続く選手の目標となってくれました。

(山手ウエルネス 山田嘉之)

ソウルYMCA (2000年〜)

ソウルYMCAとのパートナーシップが結ばれたのは2000年。最も歴史の浅いパートナーシップである一方、人的交流を主軸とする活動の蓄積が、厚い友情と信頼関係を築いています。

2002年より双方の小学生が交互に訪問する「サッカー交歓会」がスタート。その後、少しずつ参加者を増やし発展したこの活動は、現在は「キッズワールドカップ」として、毎年8月にアジア各地の小学生がスポーツを通じて親交を深める機会となっています。参加者は例年、宿泊を共にし、サッカーの他にウエルカムパーティーやレクリエーション、観光などで文化の違いを楽しみます。政治や経済における日韓対立が深刻化したときも、子どもたちは変わらず交流試合に汗を流しました。コロナの影響で今夏も中止となりましたが、アジア各地から再開への期待が寄せられています。

「ソウルー東京パートナーシップ」は、スタッフ間の学びや親交、スキルアップにも大きな役割を果たしてきました。これまでには、6カ月間のスタッフ交換研修の実施や、若手のスタッフが新人研修の一環で訪韓し見識を広めていた時期もあります。過去に民族運動の拠点となったソウルYMCAには、運動体としての活力があり、「地域社会に働きかけていく熱意や積極性に刺激を受けた」と、多くのスタッフが帰国後に報告しています。その他、台北YMCAを交えて隔年で開催される「ソウル・台北・東京YMCA指導者協議会(通称:STT)」では、役員や会員も加わって今日のアジア社会における共通の課題を協議し、連携の強化が図られています。近年のテーマは、「高齢社会におけるYMCAの役割」「北東アジアの平和と安定」「現代社会におけるキリスト教」など。コロナの状況をみながら次回は台北で開催される予定です。



韓国、日本、シンガポール、台湾、香港など、アジア各地の小学生がサッカー交流



ソウル・台北・東京のユースが石巻の仮設住宅や高齢者施設を訪ねた(2013年夏STT)



山本邦之助氏 東京YMCA 第2代総主事 (在任 1905〜23)

シリーズ 資料室の窓から(116) 電文発信者「ヤマモト」 第2代総主事山本邦之助 本会元副総主事 齊藤 實

嘗て行った東京YMCAでの最大規模の募金活動は、関東大震災からの復興建築資金募集であった。すべて寄付金で賄うもので総額160万0円、物価比較で今なら4000倍、約64億円で、募金趣意書には、予定を次のように書いていた。「モット博士ヲ通ジテ米国有志ヨリ寄付金百万円。日本ニ於ケル募金額六十万円。地震発生事ハ一九〇三年九月一日の総主事は山本邦之助であった。山本は、東京高等商業学校(現一橋大学)で学び、日本郵船(株)に勤務中の一九〇三年十二月には東京YMCA理事に就任していた。一九〇三年七月に日本YMCA同盟が発足している。一九〇四年には日露戦争

が勃発した。山本は自伝「八十翁回顧録」の「南十字を望みて」にその頃を次のように書いている。明治三十八(一九〇五。齊藤實註)年、日本基督教青年会に於て当時滿洲地方に軍隊慰問天幕部の開設せらるるに際し、我輩は委員の江原先生に随行し滿洲及び朝鮮に旅行することとなり郵船(株)に数カ月間の休暇を出願せしに、近藤社長より此軍国多事の際に蘇俄の爲働くこと不都合なり、宜しく辞表を提出すべしとの命にて即刻辞表を提出し」という。この旅行後に第2代総主事に就任する。一九〇五年九月である。更には聴こう。震災直後、山本総主事は「外務省を通して米

国YMCA同盟会長J・R・モット博士に救済品寄付方を電文で依頼した。この電報発信人たる青年会の山本の氏名が当時の外務大臣正しくは内閣総理大臣。齊藤實註山本権兵衛と誤解せられモット博士は直ちに北米赤十字社に之を移譲せられた。米国赤十字社は、それが大活動を開始した。あてで米赤十字社社長との談しを直接我輩の聞いた所によると当時北米赤十字社募金の総額は1000万ドルに達したとのことである。怪我の功名とか、山本の電文が間違つて此大救済事業の因となったとは本人さへ知らぬ所知る人を知るである」と電文発信者はまさしく「ヤマモト」であった。

東京YMCAのパートナーシップ



■YMCAのある国と地域

YMCAの「パートナーシップ」とは、異なる国や地域にある2つのYMCAが、双方の同意に基づいて形成する長期的な協力関係のことをいいます。現在、世界120の国と地域に広がるYMCAは、それぞれが独自のパートナーシップを海外YMCAとの間に築きながら、継続的な人的交流や地域に根差した国際協力活動を行っています。

国や言語、生活習慣や価値観など、さまざまな違いを越えて人と出会い、気づき変えられ、新しい何かを見出す原動力ともなってきた東京YMCAの5つのパートナーシップをご紹介します。

(広報室)

北京YMCA (1992年〜)

日本YMCA基本原則には、「私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます」と記されています。中国や韓国にあるYMCAとのパートナーシップ締結と、これを基に重ねられてきた数々の具体的な活動の根幹には、このような認識があります。

地域の人びとのニーズに応え、質の高いプログラムを提供しようと試行錯誤する北京YMCAと協働して30年。これまでには、貧困地区にある上鎮小学校への援助協力や障がい者美術展の開催、スタッフ研修の定期的な受け入れなどを実施。北京YMCAが受託運営するウエルネス施設(NOLITAセンター)における水泳のコーチング指導では、東京YMCA社会体育・保育専門学校から派遣された学生たちも活躍しました。

2016年からは、北京の親子を山中湖センターで受け入れ実施される夏季キャンプが、「北京-東京パートナーシップ」の主要プログラムとなっています。これは、「キャンプ文化が根付いていない中国の子どもたちに、グループ活動や自然に親しむ機会を提供したい」という北京YMCAからの強い



山中湖キャンプでバームクーヘン作り挑戦。「手作りできると思わなかった」と大好評だった

要望によって始まりました。初回の参加者は、引率者を含めて11人。その評判は回を追うごとに広がり、第4回までに参加者90人を数えられた。キャンプに成長しました。キャンプには、東京YMCAの専門学校生もボランティアとして毎回参加し、言葉や文化の違いに戸惑いながらも「別の日には色んな思いが溢れて涙が止まらなかった」「語学をもっと学びたいと思った」と振り返るほどの経験をえています。2019年7月を最後にコロナの影響で中止が続いていますが、一日も早い再開が望まれています。

ハワイ島YMCA (1998年〜)

ハワイ島YMCAとは、1998年のパートナーシップ締結以来、子どもたちのキャンプ、ユースボランティアの派遣と受け入れ、シニア層のための「悠々と行くハワイ」など、幅広い世代を対象に活動を展開してきました。ハワイの美しい海や生物の多様性、エネルギーやリサイクルなど、環境教育の要素が組み込まれた現地のプログラムは好評を博し、東京YMCAが1981年から実施する夏季の海外交流プログラム「ダイナミック・サマー」の一環で、これまでに多くの子どもや青年たちをハワイの大自然へと送り出しました。

世界で最も巨大な山(マウナロア)、活発な活火山(キラウエア)、エメラルドグリーン海や多様な生命がうごめく熱帯雨林など、壮大な景観を現在も保持するハワイ州では、独自に「アロハプラスチャレンジ」(ハワイ版S



「ダイナミック・サマー」は、YMCAのネットワークを通じてキャンプや語学研修、ホームステイ等を体験するプログラム。訪問先は、ハワイ、ニューヨーク、マサチューセッツ州など

DGs)を制定するなど、持続可能な社会に向けた取り組みも盛んです。ハワイ島YMCAとは、ここ数年活発な交流が持たれていませんが、今後ハワイ島の雄大な自然を活かした新たな協働プログラムの開発が期待されます。

フロストバレーYMCA (1979年〜)

東京YMCAが初めてパートナーシップを結んだのは、北米屈指の大規模なキャンプ施設を備えたフロストバレーYMCA。ニューヨーク州の自然保護区域内にある、JR山手線一周分に匹敵する広大な敷地で、民族・言語・宗教・障がい問わず誰でも受け入れる、地球市民スピリットが地に染み込んだYMCAです。

米国の日本人駐在員が増加した1970年代、東京YMCAの本間立夫主事がニューヨークに赴任して活動を開始。現地YMCAの協力を得ながら、海外生活による疲労やストレスを抱える在米日本人を対象にキャンプや水泳、フィットネスなどのプログラムを展開しました。以来今日に至るまで、異文化の狭間で暮らす日本人家族のための活動が継続されてきました。「東京-フロストバレーパートナーシップ」のプログラムの中心は、何と

いってもキャンプです。特に、約2週間のセッションを4回繰り返すサマーキャンプは、フロストバレーに常駐す



40周年記念キャンプより。パートナーシップから世代を超えたつながりが生まれている

る東京YMCAスタッフと、現地および日本から派遣される青年ボランティアが協働でキャンプコミュニティを築いて大々的に実施。参加した子どもたちからは、「同じ境遇の仲間と出会って前向きなれた」「日本をもっと知りたいと思った」などの声が毎回聞かれます。

コロナの影響を受け、2020年2月より日本からのボランティア派遣を休止していましたが、今夏は7人の学生が渡米し活躍してくれました。

バングラデシュYMCA (1990年〜)

貧困問題と向き合うYMCAとの協働を目指して、東京YMCAがバングラデシュYMCAとパートナーシップを結んだのは1990年。以来、洪水発生時の避難場所となるシェルター建設や手工芸品制作訓練による女性の自立支援、少数民族が暮らす地域での診療所運営、日本と現地の青年たちによるトイレ作りのワークキャンプなど、さまざまな活動を共に重ねてきました。

過去にワークキャンプに参加したある学生は、「自分の知っているあの人がいつまでも笑っていてくれるようにと思って日本で生活している」と帰国後の報告に記しました。これらの活動を財政的に支えるための街頭募金(1面)に子どもと立て「なぜ募金が必要なのか家族で考えるきっかけを得た」と語った保護者もいます。スキルや設備など、形あるものばかりでなく、他者のことや世界への目を開いていく体験もまた、このパートナーシップによってたらされているものです。

バングラデシュが抱える課題の一つに、子どもたちの教育があります。初等教育は完全無償の義務教育とされて



新しい制服と教科書を喜ぶNFPEの子どもたち

いるものの、多くの児童は家事手伝いなどのため登校を断念。結果として就職も困難となり、貧困から抜け出せないという悪循環が生まれています。こうした子どもたちが、仕事をしながら無理なく学習を継続できるように、バングラデシュYMCAは柔軟なカリキュラムを持った私設の学校(NFPE: Non Formal Primary Education)を国内各所につくり、現在も活動の中心に据えています。コロナ禍で休校となった期間は、教師たちが各家庭を訪問して学習の継続をサポートしました。東京YMCAもこの趣旨に賛同し、現在再開となった計7校の運営資金を支援しています。